

『伊勢物語』における「色好み」の女 -女の「いでていぬ」行動を視点として-

国語国文学専修 国文学コース 文21-560 橋本実和

【目次】

1. 概要
2. 指摘されてきた「色好み」の女の特性
3. 男のもとから去る女
4. 「いでていぬ」から見る「色好み」の女
 - (1) 異十五段の本文より
 - (2) 『古今集』から異十五段への変容より
 - (3) 『古今集』との和歌解釈の比較より
5. まとめ

1. 概要

『伊勢物語』には、異本を含め十章段に十二例の「色好み」の語が見られるが、その多くが「女」に対して用いられている。『伊勢物語』の「色好み」に関する研究は男に焦点を当てたものが目立ち、女に着目した研究は少ない。また百二十五段本を研究対象としているものがほとんどであり、異本を取り上げたものも僅かである。

したがって異本の二章段を含めた以下の六章段を「色好み」の女の登場段とし、「男」ではなく「女」の行動を視点として『伊勢物語』における女の「色好み」について再検討した。

【「色好み」の女が登場する章段と「いでていぬ」という視点】

- ・ 二十五段 「色好みなる女」
- ・ 二十八段 「色好みなりける女」—— 「いでていにければ」
- ・ 三十七段 「色好みなりける女」
- ・ 四十二段 「色好みとしるしる、女」
- ・ 異六段 (泉州本) 「色好みなりける女」
- ・ 異十五段 (阿波国文庫本) 「色好む女」 —— 「いでていなむ」

2. 指摘されてきた「色好み」の女の特性

不安にさせる
拒否する



男を翻弄する
男を嘆かせる

→二十五段・三十七段・四十二段には適当だが、六章段全てに当てはまるとは言えない。

上記の見解が当てはまらない三章段のうち、二十八段と異十五段の二章段において「いでていぬ」という女の行動が確認できるため、この表現を視点とすることで見えてくる「色好み」の女の新たな一面を考察した。

二十八段は女が男のもとから出て行った事実と男が詠じた嘆きの和歌のみという短い構成であるため、考察の余地がない。そのため今回は異十五段を中心に考えた。その中でも、以下に示したとおり女が「いでていぬ」直前までに焦点を当てて推察を行った。

男も女もかたみにおぼえければ、われもいかですてられじと、心のいとまなく
思ふになむありける。なほ女、いでていなむと思ふ心ありて、
いざ桜散らばちりなむひとさかりあり経ば人に憂き目みえなむ
と書いてなむいにける。

- ▶①女が「いでていぬ」までは男との関係は良好である（この点は二十八段も同様）
- ②「いかですてられじ」と思っているときに和歌を詠み置き、直後に出て行く

3. 男のもとから去る女

【山本登朗氏の指摘】

(前略) この短い章段では、女が出て行った理由は何も示されていないが、それに代わって、女が「色好み」であったことだけが語られている。「色好み」である以上、自然ななりゆきとして、この女は、おそらくは心変わりをして、あるいは他に男を作って、この男のもとを去ったというのであろう。

山本登朗「伊勢物語論 文体・主題・享受」(笠間書院、2001年)

→この見解を検証するため、「いでていぬ」という表現は伴わないが女が男のもとから去って行く章段(六十段・六十二段・百十二段)と比較した。

六十段

男：宮仕へいそがしく、
心もまめならざりける
女：まめに思はむといふ人
につきて、人の国へ
いにけり

六十二段

男：年ごろ訪れざりける
女：はかなき人の言につき
て、人の国なりける人に
つかはれ

百十二段

女：ことざまになりに
ければ

▶『伊勢物語』において女が男のもとから去る際にはその理由が語られ、また女が他の男について行く際にはその男の存在が明確に示されていることが確認できる。したがって山本氏の指摘は不十分であり、異十五段で「色好み」の女が男のもとから「いでてい」ったことには、他の理由があると考えられる。

4. 「いでていぬ」から見る「色好み」の女

-(1) 異十五段の本文より

- 「男も女もかたみにおぼえければ、われもいかですてられじと、心のいとまなく思ふになむありける」
→ 男も女も互いに思い合っていて、相手に捨てられないように、と考えていた。
- 「なほ女、いでていなむと思ふ心ありて、…書いてなむいにける」
→ 和歌を書き置いて、その直後に男のもとを出て行ったことから、女が詠んだ和歌「いざ桜散らばちりなむひとさかりあり経ば人に憂き目みえなむ」には、女が「いでていぬ」という行動をとった心理が現れていると考えた。
- ▶ 異十五段において「色好み」の女が詠んだ「いざ桜」歌を読み解くことにより、「いでていぬ」行動を起こした女の心理を推考していく。その上で「色好み」の女の新しい一面を考察した。

-(2) 『古今集』 から異十五段への変容より

異十五段における女の「いざ桜」歌と同様の和歌が以下のとおり『古今集』にも収録されている。

雲林院にて桜の花をよめる	承均法師
いざ桜我も散りなむひとさかりありなば人に憂きめ見えなむ	
	(春下・七七)

★まずは『古今集』から『伊勢物語』への和歌の変容を確認した。

『古今集』

詠み人：承均法師
二句：我も散りなむ
四句：ありなば人に



『伊勢物語』 異十五段

詠み人：色好む女
二句：散らばちりなむ
四句：あり経ば人に

※本稿では当該和歌の成立順を『古今集』→『伊勢物語』であるものとして考えた。

- ▶ 『古今集』では「男」が詠じたとされている和歌を、『伊勢物語』では「女」が詠んだものとし、さらに「色好み」という要素を付加している。
- ▶ ただ模倣するのではなく二句と四句で語句を変えて女の和歌として物語へと組み込まれている。

-(3) 『古今集』 との和歌解釈の比較より

★次に、先に確認した二首を比較して変容した部分や、異十五段の和歌までの語りを手掛かりに「いざ桜」歌を解釈した。

○『古今集』

いざ桜我も散りなむひとさかりありなば人に憂きめ見えなむ

→人生の老いを実感して詠まれた歌

(世間の人々においた情けない姿を見せることになってしまうことを詠む)

○『伊勢物語』 異十五段

いざ桜散らばちりなむひとさかりあり経ば人に憂き目見えなむ

→桜を自分自身に擬え、「女」としての盛りを詠んだ歌

(自分も盛りを過ぎて長く生きてしまえば、老いた情けない姿を男に見せ捨てるという不安を詠んでいる)

▶もととなった『古今集』の和歌と比較したとき、詠み手が「女」であることやそれまでの語りの部分から、異十五段の「いざ桜」歌は、老いて容姿が衰えることで自分の女としての魅力がなくなり、男に捨てられるかもしれないという「女」としての不安が前面に出た和歌と捉えることができる。

▶老いてしまう前に、「いでていぬ」ことによって自ら男のもとを去る。

5. まとめ

- 『伊勢物語』における「色好み」の女について「いでていぬ」という行動を視点として考えることにより、従来指摘されてきた「男を翻弄する」「男を嘆かせる」というような特性に加えて、新たな可能性を浮かび上がらせた。それは、女としての容姿や魅力の衰えによって男に捨てられてしまうことを恐れ、自ら男のもとを去って行くという保身的な一面である。
- 『古今和歌集』から『伊勢物語』へと和歌が入る過程で、女に「色好み」の要素が付されるほか、もとは男によって詠まれた和歌が語句の変更を経て女の和歌とされている点から、『伊勢物語』は「男」だけではなく「女」も物語において重要な役割を果たしていることを指摘できる。